

つながりましょう

10

10年かけ築いた結びつき

滋賀県東近江市の旧永源寺町に住む上田満さん(93)に最期のときが近づいている。満さんは妻の昌子さん(85)と2人暮らし。昌子さんは重い認知症だ。

斜め向かいに長男の哲さん(59)一家が住んでいるが、哲さんも妻のきよみさん(58)も、日中は仕事で留守にすることが多い。それでも「2人

ですつと過ごしたい」と話していた両親の意思を尊重し、住み慣れた自宅で介護することを選んだ。

哲さんの選択を、きよみさんの助けと永源寺診療所所長の花戸貴司医師(49)への信頼が支える。「妻には感謝している。先生は、困ったときに頼れるところがあるっていう安心感が大きい。自分たちの先生っていう感じだな」

10月最後の日曜日、満さんは自宅で息を引き取った。妻の昌子さんと、哲さん夫妻がそばにいた。穏やかな表情だったという。

私たちは診療所で花戸医師の話に耳を傾けている。

旧永源寺町は交通が不便で、医療や介護の人材も不足している。「患者も家族も

家で最後を迎えたい。じゃあどうすれば、今ある人的な資源で、家で安心して最期まで暮らせるようにできるのか」

考えた末に行き着いたのが「地域」だった。「こちらから助けを求めに行きました。『こんなおじいさんがいるけれど、どうしたらいいやろっ』って。民生委員に、近所の住民に相談を持ちかけた」

すると、住民からも困りごとを相談されるようになる。「10年ぐらいかかったかな。腹を割って話せるようになるのに」と思い返す。

相談が相談を呼び、人と人がつながって、何となく集ま

りができた。それが「チーム永源寺」。中心に花戸医師。事務局はなく、集まって情報を持ち寄り、関係を築く。いざというときは協力し合う。緩い集合体だが、強く結びついている。

花戸医師は取材中、何度か「永源寺の取り組みは、都市部でもできると思います」と口にした。都市部には趣味の仲間や勤め先の同僚など、地方のコミュニティとは違う結びつきがある。「この指止まれている感じで、医療や介護の専門職と、そういうコミュニティとを結ぶ。そして地域をつなげる。できますよ」

私たちはヒントを探しに東京へ向かった。

「意見、ご感想をお寄せください。手紙は、〒6500-8571(住所不要) 神戸新聞編集委員会「いのちをめぐる物語」係まで。ファクスは0778-33600-55116へ。メールアドレスは、inochi@kobe-np.co.jpです。取材させていただくこともありますので、できれば連絡先を記してください。」



訪問診療する花戸貴司医師
滋賀県東近江市

